

# 伊藤 文人（イトウ アヤヒト）

(ITO Ayahito)



生 年 1984 年 出 身 地 北海道

現 職 東北大学大学院教育学研究科 講師  
(令和7(2025)年12月1日現在) (Senior Assistant Professor, Graduate School of Education, Tohoku University)

専 門 分 野 社会心理学、社会神経科学

略 歴 2008 年 北海道大学医学部保健学科卒  
2010 年 東北大学大学院医学系研究科博士前期課程 修了  
2010 年 日本学術振興会特別研究員－DC  
2013 年 東北大学大学院医学系研究科博士後期課程 修了  
2013 年 博士(障害科学)の学位取得(東北大学)  
2013 年 日本学術振興会特別研究員－PD  
2014 年 東北福祉大学 感性福祉研究所 特任講師  
2017 年 日本学術振興会海外特別研究員(サウサンプトン大学)  
2019 年 高知工科大学 フューチャー・デザイン研究所 講師  
2023 年 東北大学大学院教育学研究科 講師

## 授 賞 理 由

「リアルワールドパラダイムによる社会的相互作用の神経基盤の解明と社会実装」

(Unraveling the Neural Basis of Social Interaction Using the Real-World Paradigm and Social Application)

伊藤文人氏は、社会心理学と神経科学を横断する「社会脳科学」の先端的研究で業績を積み重ねている。日常に近い対面での社会的相互作用を行う実験場面と高精細機能的磁気共鳴画像法を統合する手法(リアルワールドパラダイム)を用い、人が相手を理解・評価する脳内メカニズムを解明した。特に、初対面の異性同士の二者による会話において「自分から相手への印象」と「相手からの印象予想(反映的自己評価)」が腹内側前頭前野で符号化されることを明らかにした。さらに、安静時脳活動のパターンから互恵的な好意を機械学習で高精度に事前予測できることを示し、双方向コミュニケーションの予測モデル化を達成した。これらの基礎研究を社会に還元するため、自治体と連携して、孤独・孤立の一次予防に向けた介入効果検証を進めている点も高く評価できる。伊藤氏は社会脳科学を現実社会に結びつける研究を牽引する存在として、国内外の学際チームを率いて活躍しており、今後の更なる飛躍が期待される。

# 片岡 真伊（カタオカ マイ）

(KATAOKA Mai)



生 年 1987 年 出 身 地 栃木県

現 職 人間文化研究機構国際日本文化研究センター研究部 准教授  
(令和7(2025)年12月1日現在) (Associate Professor, Research Division, International Research Center for Japanese Studies, National Institutes for the Humanities)

専 門 分 野 日本近現代文学、比較文学

略 歴 2010年 ロンドン大学ロイヤルホロウェイ英文学部英文学専攻卒  
2011年 ロンドン大学ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン学際研究科比較文学専攻修士課程修了  
2012年 フラミンゴ東京 リサーチャー、シニアリサーチャー  
2019年 ロンドン大学 SOAS 翻訳学センター 客員研究員  
2019年 総合研究大学院大学文化科学研究科国際日本研究専攻博士後期課程修了  
2019年 博士(学術)の学位取得(総合研究大学院大学)  
2019年 ロンドン大学 SOAS 言語・文化・言語学部 シニア・ティーチング・フェロー  
2021年 東京大学東アジア藝文書院(EAA)総合文化研究科(1期) 特任研究員  
2022年 東京大学東アジア藝文書院(EAA)総合文化研究科(2期) 特任研究員  
2023年 人間文化研究機構国際日本文化研究センター研究部 准教授

## 授 賞 理 由

「英米語圏における日本近現代文学の翻訳・編集・出版現場、および受容・伝播の研究」

(Research on the Translation, Editing and Publishing Processes of Modern Japanese Literature, and the Reception and Dissemination of that Literature in the English-speaking World)

片岡真伊氏は、1950～70年代における日本近現代文学の英米語圏翻訳で中心的役割を担った米クノップ社のアーカイブを精査し、翻訳文化研究の新局面を開いた。片岡氏は、アーカイブに収蔵された出版社、翻訳者・原作者側の書簡等の一次資料を丹念に調査し、翻訳過程での葛藤や課題の実態を浮かび上がらせ、当時の現場の再現に成功した。戦後の異文化の懸け橋という重要な仕事を担った「仲介者」たちが、どのような困難にあい、それを乗り越えていったのかを実証的に探究した片岡氏の研究は、先駆的で独創性があり、国内外で高く評価されている。また、片岡氏が取り組む異文化間交流の研究は、言語学、文学だけでなく歴史学や経済学にも寄与するなど学際性に富み、今日の異文化接触の問題を考えてゆく上でも大きな示唆を与える。さらに片岡氏は近年アジア圏での翻訳文化の研究にも着手して視野を広げており、将来、さらなる研究の進展の上に、世界をリードする研究者に成長することが期待できる。

# 金子 めぐみ（カネコ メグミ）

(KANEKO Megumi)



生 年 1981 年 出 身 地 東京都

現 職 情報・システム研究機構 国立情報学研究所 教授,  
(令和7(2025)年 東京大学大学院情報理工学系研究科 教授  
12月1日現在) (Professor, National Institute of Informatics, Research Organization  
of Information and Systems, Professor, Graduate School of  
Information Science and Technology, The University of Tokyo)

専 門 分 野 無線通信ネットワーク

略 歴 2001 年 シェルマーニュ高等学校附属グランゼコール受験準備 (プレパトリ)クラス(パリ・フランス)特別数学専攻卒  
2004 年 Institut National des Télécommunications (現 Télécom  
SudParis, フランス) Diplôme d'ingénieur 修了  
2004 年 オールボー大学(デンマーク)大学院電子システム工学研究科 Master of Science (Dual Degree) 修了  
2007 年 オールボー大学(デンマーク)大学院電子システム工学研究科 Ph.D. 修了  
2007 年 博士(工学)の学位取得(オールボー大学)  
2007 年 オールボー大学大学院電子システム工学研究科 助教  
2008 年 日本学術振興会特別研究員・PD  
2010 年 京都大学大学院情報学研究科 助教  
2016 年 情報・システム研究機構 国立情報学研究所 准教授  
2017 年 パリサクレ大学(フランス)大学院情報学研究科 HDR 取得 (フランス教授資格)  
2024 年 情報・システム研究機構 国立情報学研究所 教授  
2024 年 東京大学 大学院情報理工学系研究科 教授(併任)

## 授 賞 理 由

「省電力でスマートな次世代無線通信システムの実現に向けた研究開発」

(Research and Development to Create Energy Efficient and Smart Next-Generation Wireless Communication Systems)

金子めぐみ氏は、無線通信ネットワークの研究において、高通信品質・多数接続と省電力の両立を目指して、移動体通信システムのための無線資源割り当て、多数接続への無線アクセス設計、機械学習を活用した通信品質向上などにおいて優れた成果を挙げている。金子氏は、複雑な現実的条件を取り入れた数理モデリングと無線システムの性能解析によって、理論に裏付けられたシステム設計を可能としており、その独創的な研究手法は、国内外の企業や研究者からも注目されている。金子氏は、従来法の無線資源利用効率を2倍以上に高められることの証明、複雑な干渉環境でも同時に接続可能な IoT デバイス数を約3倍まで向上、ユーザ側の AI 機能を活用し要求通信品質を高レベルで達成するなど、実用面でも重要な多くの成果を挙げている。金子氏はまた、国際的な研究活動を通じて、国際的な研究コミュニティからも高い評価と信頼を得ている。当該分野の国際的なリーダーとして、今後も更なる活躍が期待される。

# 神田 真司 (カンダ シンジ)

(KANDA Shinji)



生 年 1982 年 出 身 地 神奈川県

現 職 東京大学大気海洋研究所 准教授  
(令和7(2025)年12月1日現在) (Associate Professor, Atmosphere and Ocean Research Institute, The University of Tokyo)

専 門 分 野 動物生理学、比較内分泌学

略 歴 2005 年 国際基督教大学教養学部卒  
2007 年 東京大学大学院理学系研究科修士課程修了  
2008 年 日本学術振興会特別研究員－DC  
2010 年 東京大学大学院理学系研究科博士課程修了  
2010 年 博士(理学)の学位取得(東京大学)  
2010 年 東京大学大学院理学系研究科 特任研究員  
2012 年 東京大学大学院理学系研究科 特任助教  
2012 年 東京大学大学院理学系研究科 助教  
2016 年 東京大学大学院理学系研究科 准教授  
2019 年 東京大学大気海洋研究所 准教授

## 授 賞 理 由

「魚類を研究対象とした脳下垂体ホルモンの新規制御に関する画期的発見」

(Discoveries of Novel Regulation of Pituitary Hormones in Fish)

脊椎動物において、視床下部による下垂体の調節と、それによる全身の生理調節に関する研究は、動物生理学の中心的なテーマである。神田真司氏は、魚類を研究対象として、脳下垂体ホルモンの制御に関して独創的かつオリジナルな研究成果を挙げてきた。まず神田氏は、卵巣発達と排卵周期の制御に重要な役割を果たす卵巣刺激ホルモンの分泌制御が、それまで信じられてきたゴナドトロピン放出ホルモンではなく、視床下部性のコレシストキニンによって行われていることを発見した。さらに神田氏は、下垂体細胞が蛍光顕微鏡の励起光に反応するという偶然の観察をきっかけとして、下垂体が、外界からの光情報を直接に受容して、下垂体からのホルモン分泌を制御することで体色を調節していることを発見した。これらの成果はいずれも、学界で広く信じられてきた定説に根本的な修正を迫るものであり、動物生理学における新たな地平を切り拓いた画期的な発見である。神田氏は国際的に内分泌研究を牽引する研究者であり、今後も革新的な貢献を果たすことが期待できる。

楠 亀 裕 哉 (ク ス キ ユ ウ ヤ)

(KUSUKI Yuya)



生 年 1992 年 出 身 地 大阪府

現 職 九州大学高等研究院 准教授  
(令和7(2025)年12月1日現在) (Associate Professor, Institute for Advanced Study, Kyushu University)

専 門 分 野 素粒子論

略 歴 2016 年 大阪大学理学部卒  
2018 年 京都大学大学院理学研究科修士課程修了  
2018 年 日本学術振興会特別研究員－DC  
2021 年 京都大学大学院理学研究科博士課程修了  
2021 年 理化学研究所 基礎科学特別研究員  
2021 年 博士(理学)の学位取得(京都大学)  
2021 年 カリフォルニア工科大学 Brinson Postdoc Prize Fellowship  
2024 年 九州大学高等研究院 准教授

授 賞 理 由

「量子重力・量子多体系の境界領域における新手法の開発と応用」  
(Development and Application of Novel Methods in the Interdisciplinary Area of Quantum Gravity and Quantum Many-Body Systems)

楠亀裕哉氏は、量子重力と量子多体系という異なる理論物理分野の境界領域において、新しい理論的手法を開発し、多くの独創的成果を挙げている。博士課程在籍時に2次元共形場理論の共形ブーツトラップを解析的に解く独創的手法を単独で開発し、以後この手法は世界中の研究に広く応用されている。その後も量子重力、量子情報、量子多体系の境界領域で数々の重要な成果を上げ、ブラックホール合体過程の解析法の確立や、量子もつれエントロピー解析によるトポロジカル相の理解など、多分野に波及する発見を導いた。さらに、ホログラフィー原理を用いてエネルギーと情報の透過率の新しい不等式を導出するなど、素粒子物理と物性物理を橋渡しする独創的研究を展開している。理論物理学に新たな枠組みを切り開く先駆的研究者であり、教育面でも後進育成と国際的研究交流に尽力している。将来の更なる飛躍が強く期待される極めて有望な若手研究者である。



# 熊谷 悠（クマガイ ユウ）

(KUMAGAI Yu)



生 年 1981 年 出 身 地 滋賀県

現 職 東北大学金属材料研究所 教授

(令和7(2025)年12月1日現在) (Professor, Institute for Materials Research, Tohoku University)

専 門 分 野 計算材料学

略 歴

2005 年	京都大学 工学部卒
2007 年	京都大学大学院 工学研究科修士課程修了
2008 年	日本学術振興会特別研究員－DC
2010 年	京都大学大学院 工学研究科博士課程修了
2010 年	博士(工学)の学位取得(京都大学)
2010 年	京都大学大学院工学研究科 特定研究員
2011 年	日本学術振興会海外特別研究員 (ETH Zurich)
2012 年	東京工業大学元素戦略研究センター 特任助教
2015 年	東京工業大学元素戦略研究センター 特任講師
2016 年	科学技術振興機構(JST) さきがけ研究員
2016 年	東京工業大学元素戦略研究センター 特任准教授
2018 年	京都大学大学院工学研究科材料工学専攻 特定准教授
2019 年	東京工業大学フロンティア材料研究所 准教授
2022 年	東北大学金属材料研究所 教授

## 授 賞 理 由

「セラミック材料における点欠陥の計算科学的研究の推進とデータベースの創成」

(Computational Scientific Research on Point Defects in Ceramic Materials and Creation of a Related Database)

従来の計算科学的材料探索は、欠陥のない理想的な完全結晶を前提とするモデルに基づいて進められてきたが、熊谷悠氏は、現実の材料に不可避免的に存在する欠陥、すなわち点欠陥に着目し、それらを解析・予測するための高速で高精度な計算手法を開発した。これにより、実材料の物性や機能の本質的な理解に基づいた、新たな材料探索の枠組みを切り拓いてきた。熊谷氏が開発した点欠陥形成エネルギーの高精度な算出手法は、現在では世界標準として広く利用されており、当該分野における技術革新と理論的基盤の確立に大きく貢献している。また、熊谷氏は、欠陥情報を体系的にデータベース化することにも成功し、これはデータ駆動型アプローチによる欠陥物性の理解や新材料探索にも幅広く活用されている。

以上のように熊谷氏は、先進的セラミック材料の設計に関する計算科学的研究において、画期的かつ独創的な成果を挙げてきた。今後もセラミック材料分野を牽引する国際的な研究者として更なる活躍が期待される。

# 後藤 佑樹 (ゴトウ ユウキ)

(GOTO Yuki)



生 年 1981 年 出 身 地 兵庫県

現 職 京都大学大学院理学研究科 教授  
(令和7(2025)年12月1日現在) (Professor, Graduate School of Science, Kyoto University)

専 門 分 野 生体関連化学・ケミカルバイオロジー

略 歴 2003 年 京都大学工学部卒  
2005 年 京都大学大学院工学研究科修士課程修了  
2006 年 日本学術振興会特別研究員－DC  
2008 年 東京大学大学院工学系研究科博士課程修了  
2008 年 博士(理学)の学位取得(東京大学)  
2008 年 Postdoctoral research associate, University of Illinois at Urbana-Champaign  
2008 年 日本学術振興会海外特別研究員(イリノイ大学)  
2009 年 東京大学先端科学技術研究センター 助教  
2010 年 東京大学大学院理学系研究科化学専攻 助教  
2016 年 東京大学大学院理学系研究科化学専攻 准教授  
2024 年 京都大学大学院理学研究科化学専攻 教授

## 授 賞 理 由

### 「試験管内人工生合成系による擬天然ペプチドの創製研究」

(Development of Artificial In Vitro Biosynthesis Systems for Pseudo-Natural Peptides)

ペプチドは、アミノ酸がつながった小型のタンパク質で、従来の低分子化合物と抗体医薬の長所を合わせもつ新しいタイプの医薬品として注目されている。しかし、天然のアミノ酸だけを組み合わせたペプチドでは、必ずしも高い活性が得られないことがある。後藤佑樹氏は、人工的なアミノ酸を用いてペプチド骨格を構築し、さらに酵素工学的手法で環状化や官能基修飾を加えることで、より複雑で高機能な擬天然ペプチドの創製法開発に成功した。本手法では、1兆種以上に及ぶ多様な化合物群から有望な薬剤候補を迅速に選り出すことができる。擬天然ペプチドは体内で分解されにくく、細胞膜も通過しやすいため、薬効や持続性の向上が期待される。後藤氏の技術は国内外の製薬企業に技術移転されており、人工ペプチド設計と酵素修飾を組み合わせた革新的な中分子創薬を牽引する研究者として高く評価されている。

# 今野 北斗 (コンノ ホクト)

(KONNO Hokuto)



生 年 1991 年 出 身 地 東京都

現 職 東京大学大学院数理科学研究科 准教授  
(令和7(2025)年12月1日現在) (Associate Professor, the Graduate School of Mathematical Sciences, the University of Tokyo)

専 門 分 野 ゲージ理論と4次元トポロジー

略 歴 2014 年 早稲田大学基幹理工学部卒  
2016 年 東京大学大学院数理科学研究科修士課程修了  
2016 年 日本学術振興会特別研究員－DC  
2019 年 東京大学大学院数理科学研究科博士課程修了  
2019 年 博士(数理科学)の学位取得(東京大学)  
2019 年 理化学研究所 基礎科学特別研究員  
2020 年 東京大学大学院数理科学研究科 助教  
2022 年 日本学術振興会海外特別研究員(マサチューセッツ工科大学)  
2024 年 東京大学大学院数理科学研究科 准教授

## 授 賞 理 由

「族のゲージ理論と4次元トポロジーへの応用」

(Family Gauge Theory and Its Applications to Four-Dimensional Topology)

幾何学において4次元トポロジーは近年活発に研究が進展している分野であり、今野北斗氏はこの分野の最先端で優れた研究成果を次々と挙げてきた。位相多様体がいづ可微分構造を許容するかは基本的な問題であるが、4次元の場合は他の次元の場合と大きく異なる様相を呈する。今野氏は4次元多様体の族の上のゲージ理論を体系的に発展させ、それを応用することによって4次元多様体の可微分構造を保つ変換全体からなる微分同相群に関して多くの著しい結果を得ている。特に、4次元以外では単連結閉多様体の微分同相群から定まる写像類群が有限生成であるのに対して、今野氏は、それが無限生成であるような単連結閉4次元多様体の構成に成功しており、4次元における可微分構造の特異性を示す新たな現象を明らかにしたものとして国際的な評価も高い。

今野氏はゲージ理論の分野において新たな研究の流れを主導する世界的若手リーダーの一人であり、さらなる活躍が期待される。



# 沙川 貴大（サガワ タカヒロ）

(SAGAWA Takahiro)



生 年 1983 年 出 身 地 兵庫県

現 職 東京大学大学院工学系研究科 教授  
(令和7(2025)年12月1日現在) (Professor, School of Engineering, The University of Tokyo)

専 門 分 野 統計物理学および量子情報理論

略 歴 2006 年 京都大学理学部卒  
2008 年 東京工業大学大学院理工学研究科修士課程修了  
2008 年 日本学術振興会特別研究員－DC  
2011 年 東京大学大学院理学系研究科博士課程修了  
2011 年 博士(理学)の学位取得(東京大学)  
2011 年 京都大学白眉センター 特定助教  
2013 年 東京大学大学院総合文化研究科 准教授  
2015 年 東京大学大学院工学系研究科 准教授  
2020 年 東京大学大学院工学系研究科 教授

## 授 賞 理 由

### 「情報熱力学の理論構築とその応用」

(Theoretical Framework and Applications of Information Thermodynamics)

近年、統計物理では「情報」と「エネルギー」の関係が注目されている。粒子の位置や細胞の化学状態、メモリの内容といった情報を用いて系に適切なフィードバックを行うと、熱揺らぎを利用して仕事を取り出せる。このような情報とエネルギーの結びつきを扱う分野が「情報熱力学」である。沙川貴大氏の最大の成果は、熱力学の象徴的思考実験「マクスウェルのデーモンのパラドックス」を現代的に再定式化し、熱力学第二法則を情報量を含めた形に拡張した点にある。これにより、デーモンが得る情報がエネルギーに変換される限界が定量化され、長年のパラドックスは、測定・フィードバック・情報消去の全過程を考慮すれば第二法則と矛盾しないことが示された。また、沙川氏はコロイド粒子を用いた実験系を提案し、情報を実際に仕事や自由エネルギーに変換する実証に成功した。これらは非平衡統計力学と情報理論を架橋し、情報熱力学を確立した画期的成果である。計算機の消費電力が課題となる現在、この理論は高効率情報処理や量子情報科学へ波及が期待され、同氏の研究は国際的にも高く評価される。

# 佐田 亜衣子（サダ アイコ）

(SADAAIKO)



生 年 1983 年 出 身 地 埼玉県

現 職 九州大学生体防御医学研究所 教授  
(令和7(2025)年12月1日現在) (Professor, Medical Institute of Bioregulation, Kyushu University)

専 門 分 野 幹細胞生物学、発生生物学、皮膚科学

略 歴 2006 年 静岡大学理学部卒  
2008 年 日本学術振興会特別研究員－DC  
2011 年 総合研究大学院大学生命科学研究科博士課程修了  
2011 年 博士(理学)の学位取得(総合研究大学院大学)  
2011 年 米国コーネル大学 博士研究員  
2014 年 日本学術振興会海外特別研究員(コーネル大学)  
2016 年 筑波大学生存ダイナミクス研究センター 助教  
2019 年 熊本大学国際先端医学研究機構 特任准教授  
2023 年 九州大学生体防御医学研究所 教授

## 授 賞 理 由

「異なる幹細胞タイプの共存・協働に着眼した組織恒常性・老化の研究」

(Unraveling the Stem Cell Dynamics in Tissue Homeostasis and Aging)

成体では、絶えず新しい細胞が供給されるおかげで、器官および組織に構造的・機能的な秩序・安定がもたらされる。そうした恒常性の原動力として知られる未分化な幹細胞について、旧来は「分裂頻度が低い・増殖速度が遅い」と信じられてきた。そして高頻度分裂・高速増殖を示すのは若干の分化傾向を有する非幹細胞であると思われてきた。佐田亜衣子氏は、表皮組織の幹細胞には「分裂頻度が高い・増殖速度が速い」タイプもあることを留学中に見出したが、その発見を帰国後、研究室主宰者として大きく発展させ、若齢者の皮膚における表皮組織の正常なターンオーバーには前者（既知であった低頻度分裂タイプ）と後者（新発見の高頻度分裂タイプ）の協働が重要であること、高齢・老化の皮膚で認められるようなレジリエンスすなわち抵抗性の低下には後者（高頻度分裂タイプ）の不足が関与していることを見出し、その分子メカニズムの一端を明らかにした。表皮システム（の老化）の解明は、社会への波及力も大きい。

# 鈴木 康介（スズキ コウスケ）

(SUZUKI Kosuke)



生 年 1982 年 出 身 地 静岡県

現 職 東京大学大学院新領域創成科学研究科 教授  
(令和7(2025)年 12 月 1 日現在) (Professor, Graduate School of Frontier Sciences, The University of Tokyo)

専 門 分 野 無機材料化学、触媒化学

略 歴 2005 年 東京大学工学部卒  
2007 年 東京大学大学院工学系研究科修士課程修了  
2008 年 日本学術振興会特別研究員－DC  
2010 年 東京大学大学院工学系研究科博士課程修了  
2010 年 博士(工学)の学位取得(東京大学)  
2010 年 日本学術振興会特別研究員－PD  
2010 年 東京大学大学院工学系研究科 特任助教  
2010 年 東京大学大学院工学系研究科 助教  
2018 年 東京大学大学院工学系研究科 講師  
2019 年 東京大学大学院工学系研究科 准教授  
2025 年 東京大学大学院新領域創成科学研究科 教授

## 授 賞 理 由

### 「原子レベルで構造制御した分子状無機物質の開発」

(Development of Molecular Inorganic Materials with Atomic-Level Structural Control)

鈴木康介氏は、産業や社会に不可欠な無機材料科学分野において、有機化学および錯体化学の精密合成の考え方と手法を取り入れ、従来の無機物質では困難であった原子レベルでの構造制御を可能とする新たな分子状無機物質の合成技術を確立した。この技術により金属酸化物クラスター、無機－有機複合分子、金属微粒子などの厳密に構造制御された新物質の開発に成功した。さらに、これらの物質が従来法では達成できなかった触媒作用や物性を示すことを解明した。鈴木氏が創製した無機物質は、触媒材料にとどまらず、電子機能性・磁気機能性材料などへの展開が期待される。

以上のように、鈴木氏は、原子レベルで構造が精密に制御され、かつ高い実用性を備えた無機物質を創成する新しいアプローチを確立した。その成果は、学術と産業の両面においてきわめて大きな意義を有しており、無機化学における構造制御と機能発現の関係に新たな学理的展開をもたらした。これらの卓越した業績は、無機機能性材料の研究分野を大きく発展させるものであり、今後のさらなる活躍が期待できる。

# 鈴木 大慈 (スズキ タイジ)

(SUZUKI Taiji)



生 年 1981 年 出 身 地 東京都

現 職 東京大学大学院情報理工学系研究科 教授  
(令和7(2025)年12月1日現在) (Professor, Graduate School of Information Science and Technology, The University of Tokyo)

専 門 分 野 機械学習

略 歴 2004 年 東京大学工学部卒  
2006 年 東京大学大学院情報理工学系研究科修士課程修了  
2006 年 日本学術振興会特別研究員－DC  
2009 年 東京大学大学院情報理工学系研究科博士課程修了  
2009 年 博士(情報理工学)の学位取得(東京大学)  
2009 年 東京大学大学院情報理工学系研究科 助教  
2013 年 東京工業大学大学院情報理工学研究科 准教授  
2016 年 東京工業大学情報理工学院 准教授  
2016 年 理化学研究所革新知能統合研究センター チームディレクター(現在に至る)  
2017 年 東京大学大学院情報理工学系研究科 准教授  
2024 年 東京大学大学院情報理工学系研究科 教授

## 授 賞 理 由

### 「深層基盤モデルの基礎理論の創成」

(Development of Fundamental Theories for Deep Foundation Models)

生成 AI が台頭し、AI 技術の社会的重要性が急速に高まっている今日、AI の内部挙動に関する理論的な理解は極めて重要である。鈴木大慈氏は、深層基盤モデルの有効性が本質的にその特徴学習能力に立脚しているという着眼点に立ち、学習メカニズムの包括的解明に関する独創的な研究を行ってきた。「深層基盤モデルの優位性の理論」、「学習ダイナミクスの理論」、および、「テスト時推論」といった三つの理論の構築を核として、従来の学習理論では説明ができなかった深層学習の高い能力を理論的に解明した成果は、その優れた研究構想力と精緻な数学的理論展開と共に、国際的に高く評価されている。

多くの研究者がしのぎを削る研究分野において、その発展を支える重要な理論的基盤を構築し、産業界主導で進む技術革新に対しても学問的な礎を与えた意義・貢献は大きく、次世代 AI の研究開発を牽引する国際的な研究者として、ますますの活躍と飛躍が期待できる。

# 高橋 重成 (タカハシ ノブアキ)

(TAKAHASHI Nobuaki)



生 年 1982 年 出 身 地 東京都

現 職 京都大学大学院工学研究科 教授  
(令和7(2025)年12月1日現在) (Professor, Graduate School of Engineering, Kyoto University)

専 門 分 野 生体機能分子医化学

略 歴 2006 年 京都大学工学部卒  
2008 年 京都大学大学院工学研究科修士課程修了  
2009 年 日本学術振興会特別研究員－DC  
2010 年 京都大学大学院工学研究科博士課程修了(期間短縮)  
2010 年 博士(工学)の学位取得(京都大学)  
2010 年 京都大学先端医工学研究ユニット 特定助教  
2014 年 日本学術振興会海外特別研究員(ハーバード大学医学大学院)  
2015 年 ハーバード大学医学大学院 講師  
2019 年 京都大学白眉センター 特定准教授  
2023 年 京都大学大学院工学研究科 准教授  
2025 年 京都大学大学院工学研究科 教授

## 授 賞 理 由

### 「生体内ストレス感知・応答機能の解明」

(Sensing and Adaptation Mechanisms for Oxygen and Oxidative Stress in Life)

生物が生存するためには、外界から加わる多様なストレスに適応する力が不可欠である。活性酸素種(ROS)は、過剰になると細胞機能や生存を脅かす代表的な環境ストレスであるが、その感知機構の全容は長らく不明であった。高橋重成氏は、低温や辛味・痛みの感覚受容体として知られる TRPA1 チャンネルに着目し、これが ROS によるシステイン残基酸化やプロリン残基水酸化を感知して「酸化ストレス」や「低酸素」を察知する新しいセンサーであることを発見した。さらに、TRPA1 をがん細胞生存の機構解明研究にも展開し、がん細胞で TRPA1 が高発現することがカルシウムシグナルを介して酸化ストレスによる細胞死を回避させる仕組みを明らかにした。独自開発の ROS 集積プローブによるライブセル解析では、酸化ストレスの集中領域でがん細胞が可塑性を高め、上皮間葉転換と転移能を獲得する過程を実証した。これらの成果は、酸化ストレスが細胞運命を制御する新たな原理を示す先駆的業績である。



# 竹岡 彩 (タケオカ アヤ)

(TAKEOKA Aya)



生 年 1980 年 出 身 地 東京都

現 職 理化学研究所脳神経科学研究センター チームディレクター  
(令和7(2025)年12月1日現在)  
(Team Director, Center for Brain Science, RIKEN)

専 門 分 野 脳神経科学

略 歴 2003 年 Oberlin 大学 Neuroscience 学部卒  
2010 年 University of California, Los Angeles 大学院  
Molecular, Cellular and Integrative Physiology 研究  
科博士課程修了  
2010 年 博士(脳神経生物学)の学位取得(カリフォルニア大学)  
2010 年 Friedrich Miescher Institute for Biomedical Research  
博士研究員  
2016 年 フランダーズバイオテクノロジー研究所グループリーダー、  
カトリックルーベン大学 准教授  
2024 年 理化学研究所脳神経科学研究センター チームディレクタ  
ー

## 授 賞 理 由

### 「運動神経回路による運動学習と記憶の形成と保持のメカニズムの解明」

(Neurocircuit Mechanisms of Motor Learning and Memory Formation and Retention)

脊髄は脳からの指令を全身に伝達し、全身からの情報を脳に伝える情報伝達経路である。竹岡彩氏は一貫して、脊髄を対象とする研究を推進してきた。竹岡氏は、不完全脊髄損傷からの運動機能回復に筋肉や腱からの体性感覚入力が必要不可欠であることを示した。また、新生仔期に脊髄損傷を受けたマウスは歩行能力の回復が可能な点に着目し、興奮性介在ニューロンが放出する神経伝達物質の種類によって損傷後の運動機能回復の成否が決定されることを明らかにした。さらに、覚醒行動中の脊髄内電気生理学的記録手法を確立し、脳に依存しない脊髄固有の運動学習・運動記憶の制御機構を解明した。

竹岡氏の研究は、脊髄神経回路の可塑性という分野を開拓した独創的なものであり、脊髄神経の動作原理の理解に大幅な進展をもたらした。臨床応用への橋渡しに貢献しうる点も意義深い研究であり、今後も主導的な研究者であり続けることが期待できる。

# 樽野 陽幸（タルノ アキユキ）

(TARUNO Akiyuki)



生 年 1982 年 出 身 地 京都府

現 職 京都府立医科大学大学院医学研究科 教授

(令和7(2025)年 12月1日現在) (Professor, Graduate School of Medical Science, Kyoto Prefectural University of Medicine)

専 門 分 野 感覚の神経生理科学

略 歴 2007年 京都府立医科大学 医学部医学科卒  
2008年 日本学術振興会特別研究員－DC  
2010年 京都府立医科大学大学院 医学研究科博士課程修了  
2010年 博士(医学)の学位取得(京都府立医科大学)  
2010年 日本学術振興会特別研究員－PD  
2010年 ペンシルバニア大学医学部(米国) 博士研究員(日本学術振興会優秀若手研究者海外派遣事業)  
2011年 ペンシルバニア大学医学部(米国) 博士研究員  
2013年 京都府立医科大学大学院医学研究科 助教  
2014年 京都府立医科大学大学院医学研究科 講師  
2018年 科学技術振興機構(JST) さきがけ研究員(兼任～2022年3月)  
2018年 京都府立医科大学大学院医学研究科 教授

## 授 賞 理 由

### 「チャネルシナプスの発見とその生命機能の探究」

(Discovery of the Epithelial Channel Synapse and Its Biological Functions)

動物が感覚受容細胞で受け取った光や匂いなどの刺激は、神経細胞を介して脳に伝わる。このとき、細胞間の接続部であるシナプスで授受される神経伝達物質の分泌機構としてはシナプス小胞の開口のみが知られていた。

樽野陽幸氏は、味細胞では膜電位依存的に開口するイオンチャネルからアデノシン3リン酸(ATP)が放出され、味覚神経細胞のATP受容体に作用することを発見した。樽野氏はこの新規の伝達様式をチャネルシナプスと命名し、チャネルシナプスが甘味、苦味、うま味、塩味の神経伝達を担うことを明らかにした。さらに、咽喉頭上皮に迷走神経とチャネルシナプスを形成する感覚細胞群を発見し、これらが嚥下や咳嗽反射を引き起こすことを示した。

チャネルシナプスの発見を発端とした一連の研究成果は、神経科学の教科書を刷新し、新たな研究分野を切り拓くものであり、医学、創薬学への応用展開が期待される。樽野氏は今後もこの分野をけん引し、世界的に活躍することが期待できる。

# 富樫 庸介（トガシ ヨウスケ）

(TOGASHI YOSUKE)



生 年 1982 年 出 身 地 新潟県

現 職 岡山大学学術研究院医歯薬学域(医) 教授、岡山大学病院教授  
(令和7(2025)年12月1日現在) (Professor, Faculty of Medicine, Dentistry and Pharmaceutical Sciences (Medicine), Okayama University Professor, Okayama University Hospital)

専 門 分 野 腫瘍免疫学

略 歴 2006 年 京都大学医学部医学科卒  
2011 年 京都大学大学院医学研究科 助教  
2014 年 日本学術振興会特別研究員－DC  
2015 年 近畿大学大学院医学研究科博士課程修了  
2015 年 博士(医学)の学位取得(近畿大学)  
2016 年 国立がん研究センター研究所 研究員  
2017 年 日本学術振興会特別研究員－PD  
2019 年 千葉県がんセンター研究所 部長代理  
2021 年 岡山大学学術研究院医歯薬学域(医) 教授  
2024 年 岡山大学病院 教授(兼任)

## 授 賞 理 由

### 「ミトコンドリア伝播による新たながん免疫逃避機構の解明」

(A Novel Mechanism of Cancer Immune Evasion via Mitochondrial Transfer)

腫瘍浸潤 T 細胞は抗がん免疫を構成する中心的な細胞であるが、腫瘍微小環境下においてはその機能が減弱することが知られている。富樫庸介氏は、がん細胞由来の変異ミトコンドリアが T 細胞へと伝播することにより、その機能を低下させるという新たな機構を明らかにした。マウス実験系において、変異ミトコンドリアを有する T 細胞で機能低下がみられ、免疫療法の効果が減弱することを示した。さらに、ヒト臨床検体の解析においても、変異ミトコンドリアを持つ患者は、持たない患者に比べて免疫チェックポイント阻害による治療効果が不良であることを実証した。ミトコンドリアの細胞間伝播現象自体は以前から知られていたが、がんにおける免疫回避機構への関与を示した本発見は、学術的に極めて重要であり、がん治療開発の観点からも大きな意義を有するものである。富樫氏は呼吸器内科学教授を兼務し、我が国において不足している Physician Scientist の育成にも顕著な貢献を果たしており、今後、日本の医学・医療を先導する人材として強く期待される。

# 長谷川 知子（ハセガワ トモコ）

(HASEGAWA Tomoko)



生 年 1982 年 出 身 地 大阪府

現 職 立命館大学総合科学技術研究機構 教授  
(令和7(2025)年12月1日現在) (Professor, Research Organization of Science and Technology, Ritsumeikan University)

専 門 分 野 環境システム工学

略 歴 2006 年 大阪市立大学工学部環境都市工学科卒  
2008 年 京都大学大学院地球環境学舎修士課程修了  
2008 年 日本学術振興会特別研究員－DC  
2011 年 京都大学大学院工学研究科博士課程修了  
2011 年 博士(工学)の学位取得(京都大学)  
2011 年 日本学術振興会特別研究員－PD  
2014 年 国立環境研究所 特別研究員  
2016 年 国立環境研究所 研究員  
2016 年 日本学術振興会海外特別研究員(国際応用システム分析研究所)  
2019 年 立命館大学理工学部 准教授  
2024 年 立命館大学総合科学技術研究機構 教授

## 授 賞 理 由

### 「気候変動抑制と食料安全保障の関係性の解明」

(Research on Climate Change Mitigation and Food Security)

長谷川知子氏は、気候変動に関する社会課題の解決を目的に、コンピュータシミュレーションの開発を精力的に進めている。主な研究は二点に集約される。第一に、気候変動政策を食料安全保障・経済・農業・土地利用などの観点から統合的に評価できるモデルを構築し、バイオ燃料生産と飢餓リスク、および生物多様性保全とのトレードオフを定量化した。これにより、気候変動対策を優先しすぎた政策が、途上国の飢餓リスク増大や生態系悪化を招く可能性を指摘した。第二に、異なる地域スケールで脱炭素化を分析できるモデルを開発し、それをアジア諸国に適用した。これにより、各国の農業由来温室効果ガス排出削減量を評価して政策策定に資する枠組みを整備し、東南アジア諸国の研究者や政策担当者と協働して地域特性を踏まえた脱炭素シナリオを策定している。こうした国際的貢献に加え、200報近い原著論文の発表も高く評価された。今後も、気候変動研究と環境政策に大きく貢献することが期待される。

# 晝間 敬（ヒルマ ケイ）

(HIRUMA Kei)



生 年 1983 年 出 身 地 京都府

現 職 東京大学大学院総合文化研究科 准教授  
(令和7(2025)年12月1日現在) (Associate Professor, Graduate School of Arts and Sciences and the College of Arts and Sciences, The University of Tokyo)

専 門 分 野 植物微生物相互作用

略 歴 2007 年 京都大学農学部卒  
2009 年 京都大学大学院農学研究科修士課程終了  
2010 年 日本学術振興会特別研究員－DC  
2012 年 京都大学大学院農学研究科博士課程終了  
2012 年 博士(農学)の学位取得(京都大学)  
2012 年 日本学術振興会海外特別研究員(マックスプランク研究所)  
2014 年 奈良先端科学技術大学院大学 助教  
2016 年 科学技術振興機構(JST) さきがけ研究員(兼任～2020 年 3 月)  
2020 年 東京大学大学院総合文化研究科 准教授

## 授 賞 理 由

「糸状菌の連続的な植物寄生・共生戦略の分子機構に関する研究」

(Molecular Mechanisms Underlying Fungal Strategies for Plant Colonization along the Parasitism-Mutualism Continuum)

植物と相互作用する糸状菌の中には、植物に病気を引き起こす寄生(病原)菌だけでなく、成長を促進する共生菌も存在するものの、両者を区別する分子機構は明らかにされていなかった。晝間敬氏は、アブラナ科植物のシロイヌナズナに炭疽病を引き起こす *Colletotrichum* 属菌の中に、土壌から吸収したリンを植物に供給できる共生的形質を示す系統を発見し、進化の過程で菌根共生を捨てたアブラナ科植物にも微生物との共生機構が存在することを明らかにした。さらに、病原型および共生型株の比較ゲノム解析から、病原型に特異的な二次代謝産物遺伝子クラスターを見出し、この領域の一部を欠損させると共生型に移行すること、また、この領域の転写因子の発現が共生型から病原型への移行を連続的に調節していることを明らかにした。

これら寄生・共生の連続性の分子基盤を明らかにした晝間氏の業績は、当該分野に新たな潮流をもたらした。今後も世界をリードする研究者として活躍することが期待できる。



# 松久 直司（マツヒサ ナオジ）

(MATSUHISA Naoji)



生 年 1990 年 出 身 地 兵庫県

現 職 東京大学先端科学技術研究センター 准教授  
(令和7(2025)年12月1日現在) (Associate Professor, Research Center for Advanced Science and Technology, The University of Tokyo)

専 門 分 野 ストレッチャブルエレクトロニクス

略 歴 2012 年 東京大学工学部卒  
2014 年 東京大学大学院工学系研究科修士課程修了  
2016 年 日本学術振興会特別研究員－DC  
2017 年 東京大学大学院工学系研究科博士課程修了  
2017 年 博士(工学)の学位取得(東京大学)  
2017 年 東京大学大学院工学系研究科 研究員  
2017 年 Nanyang Technological University Research Fellow  
2019 年 日本学術振興会海外特別研究員(スタンフォード大学)  
2020 年 慶應義塾大学理工学部 専任講師  
2022 年 東京大学生産技術研究所 准教授  
2023 年 東京大学先端科学技術研究センター 准教授

## 授 賞 理 由

### 「超柔軟材料による伸縮性電子デバイス」

(Stretchable Electronic Devices Using Soft Materials)

柔軟で伸縮性を備えた電子デバイスは、健康・医療分野における生体情報モニタリングや、先進ロボティクス分野におけるセンシングおよびインターフェース技術を、大きく革新する可能性を秘めている。

松久直司氏は、従来、電子デバイスの材料としては不適とされてきたゴムのような柔軟素材に対し、導電性あるいは半導体特性を付与することに成功した。さらに、これらの伸縮性電子材料を活用したデバイスの製造プロセスの開発から、新たな駆動システムの構築までを一貫して推進し、高性能かつ伸縮性を有するトランジスタ、センサ、電池、ディスプレイなどを実現した。

これら一連の成果は、「ストレッチャブルエレクトロニクス」という新たな研究分野の創出を牽引するものであり、その中心的な役割を担った松久氏は、当該分野をリードする若手研究者として国際的に高く評価され、今後のさらなる活躍が期待される。

# 三浦 典之（ミウラ ノリユキ）

(MIURA Noriyuki)



生 年 1980 年 出 身 地 大分県

現 職 大阪大学大学院情報科学研究科 教授

(令和7(2025)年12月1日現在) (Professor, Graduate School of Information Science and Technology, The University of Osaka)

専 門 分 野 半導体集積回路工学

略 歴 2003 年 慶應義塾大学理工学部卒  
2005 年 慶應義塾大学大学院理工学研究科前期博士課程修了  
2005 年 日本学術振興会特別研究員－DC  
2007 年 慶應義塾大学大学院理工学研究科後期博士課程早期修了  
2007 年 博士(工学)の学位取得(慶應義塾大学)  
2007 年 慶應義塾大学理工学部 訪問研究員  
2007 年 日本学術振興会特別研究員－PD  
2008 年 慶應義塾大学理工学部 特別研究助教  
2011 年 慶應義塾大学理工学部 特任助教  
2012 年 神戸大学自然科学系先端融合研究環 特命助教  
2016 年 神戸大学大学院システム情報学研究科 准教授  
2018 年 科学技術振興機構(JST) さきがけ研究員(兼任～2022年9月)  
2020 年 大阪大学大学院情報科学研究科 教授

## 授 賞 理 由

### 「近接電磁場を積極活用する革新的半導体コンピューティング技術の開拓」

(Pioneering Semiconductor Computing Technology Leveraging Electromagnetic Near Field)

Society 5.0 の実現が期待される中で、半導体集積回路(IC)の微細化と低コスト化における技術的な限界突破が求められている。その中で三浦典之氏は、IC 周辺に発生し誤作動要因とされてきた近接電磁場を敢えて IC 設計に取り込む協調設計論を提唱し、独創的なアプローチを開拓してきた。この設計論に基づき、三次元積層 IC チップ間の超短距離無線技術(通信)、チップ攻撃検出技術(センシング)、微小粉末 IC 群によるシステム構成技術(ハードウェア)を開発した。三浦氏のこれらの成果により、従来の IC を基本としたコンピューティングシステムの形状、機能、用途を飛躍的に発展させる土台が築かれ、海外研究者も後に続いている。

三浦氏は、現在では粉末コンピューティングシステムを非侵襲的センシングに応用する取り組みを通して分野横断型の学際研究を推進しており、今後も Society5.0 の実現に大きく寄与し、その先の新たな社会を開拓する研究者として世界をリードする活躍が期待できる。

# 三浦 正志（ミウラ マサシ）

(MIURA Masashi)



生 年 1980 年 出 身 地 青森県

現 職 成蹊大学大学院理工学研究科 教授/リーディングリサーチャー、  
(令和7(2025)年12 米国ロスアラモス国立研究所 長期客員研究員  
月1日現在) (Professor / Leading Researcher, Graduate School of Science and  
Technology, Seikei University,  
Long Term Visiting Researcher / Los Alamos National Laboratory,  
United States)

専 門 分 野 薄膜電子材料、固体物性

略 歴 2003 年 山形大学工学部卒(2001 年編入学)  
2005 年 名古屋大学大学院理工学研究科修士課程修了  
2006 年 日本学術振興会特別研究員－DC  
2007 年 名古屋大学大学院理工学研究科博士課程修了(在学期間短縮)  
2007 年 博士(工学)の学位取得(名古屋大学)  
2007 年 日本学術振興会特別研究員－PD  
2009 年 米国ロスアラモス国立研究所 Visiting Researcher  
2010 年 米国ロスアラモス国立研究所 Director's Postdoctoral Fellow (称号)  
2012 年 成蹊大学理工学部/大学院理工学研究科 准教授  
2012 年 米国ロスアラモス国立研究所 Long Term Visiting Researcher  
2017 年 成蹊大学理工学部/大学院理工学研究科 教授  
2019 年 米国スタンフォード大学 Visiting Researcher (～2020 年 9 月)  
2021 年 科学技術振興機構(JST) 創発的研究支援事業研究代表者(現在に至る)  
2024 年 成蹊大学 リーディングリサーチャー(称号)

## 授 賞 理 由

### 「超伝導薄膜の臨界電流密度向上に関する先駆的研究」

(Pioneering Research on the Improvement of Critical Current Density in Superconducting Thin Films)

超伝導材料の実用性能を左右する最も重要な材料特性の一つは、臨界電流密度  $J_c$  (電気抵抗なく流せる電流密度) の大きさである。三浦正志氏は、超伝導マグネット応用などで重要となる磁場中の  $J_c$  の向上について薄膜を対象に研究を推進し、銅酸化物系超伝導薄膜、鉄系超伝導薄膜など各材料系における  $J_c$  値を更新してきている。特に、銅酸化物系超伝導  $YBa_2Cu_3O_y$  薄膜においては、実用上重要となる 500～1000 nm 程度の膜厚を有するすべての超伝導材料の中で、最高の  $J_c$  値を達成し、基礎理論のみならず実用上も大きなインパクトを与えた。これらの成果は、三浦氏の提唱する新しい材料設計指針によって達成されたものであり、本分野の材料開発を国際的に先導するものである。

このように三浦氏は、先進超伝導材料開発において世界的にも重要な研究成果を挙げてきた。当該分野をリードする研究者として今後も更なる活躍が期待される。

# 宮園 健吾 (ミヤゾノ ケンゴ)

(MIYAZONO Kengo)



生 年 1980 年 出 身 地 兵庫県

現 職 北海道大学大学院文学研究院 准教授  
(令和7(2025)年12月1日現在) (Associate Professor, Faculty of Humanities and Human Sciences, Hokkaido University)

専 門 分 野 分析哲学、心の哲学、心理学の哲学

略 歴 2005 年 早稲田大学教育学部卒業  
2008 年 東京大学大学院人文社会系研究科修士課程修了  
2010 年 日本学術振興会特別研究員－DC  
2012 年 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程単位取得退学  
2012 年 東京大学大学院人文社会系研究科次世代人文学開発センター 研究員  
2013 年 日本学術振興会海外特別研究員(バーミンガム大学)  
2014 年 博士(文学)の学位取得(東京大学)  
2015 年 日本学術振興会特別研究員－PD  
2016 年 広島大学大学院総合科学研究科 准教授  
2020 年 北海道大学大学院文学研究院 准教授

## 授 賞 理 由

### 「合理性と非合理性についての哲学的学際的研究」

(Philosophical and Interdisciplinary Studies of Rationality and Irrationality)

宮園健吾氏の研究は、心の「不合理性」や「異常」に注目し、合理的で正常な心の働きを明らかにしようとするものである。とりわけ、「妄想」(delusion)をめぐる研究では、妄想を「機能不全の信念」ととらえるという独創的な戦略を採り、関連分野での様々な論争と未解決課題に対し、説得力のある答えを導いている。また、宮園氏は、妄想が引き起こされる要因について、個人の心に重点を置いた従来の解釈を転換して「他者からの証言」という社会的要因に着目した議論を展開し、当該研究分野及び関連分野に多大な影響を与えた。そのほか、信念の正当化における想像力の役割や認識的ナッジに関してもレベルの高い研究を行い、心的作用の合理性・非合理性に関する哲学に関しては、若手の代表的な研究者と呼べる地位を築いている。

こうした宮園氏の研究は、その質と圧倒的な量において、また国際性や文理融合的学際性において、独創性と創造性を十分に備えたもので、確かな将来性が見込まれる。

# 八尾 史 (ヤオ フミ)

(YAO Fumi)



生 年 1981 年 出 身 地 埼玉県

現 職 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授  
(令和7(2025)年12月1日現在) (Associate Professor, Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo)

専 門 分 野 仏教学

略 歴 2004 年 東京大学文学部卒  
2006 年 東京大学大学院人文社会系研究科修士課程修了  
2007 年 日本学術振興会特別研究員－DC  
2010 年 東京大学大学院人文社会系研究科特任研究員  
2011 年 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了  
2011 年 博士(文学)の学位取得(東京大学)  
2012 年 日本学術振興会特別研究員－PD  
2013 年 マクマスター大学ポスドクフェロー  
2015 年 日本学術振興会海外特別研究員(マクマスター大学)  
2017 年 早稲田大学高等研究所 助教  
2018 年 早稲田大学高等研究所 講師  
2020 年 駒澤大学仏教学部仏教学科 講師  
2023 年 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授

## 授 賞 理 由

### 「根本説一切有部律」に埋め込まれた経典群の研究」

(Studies on Sutras Embedded in the Mulasarvastivada Vinaya)

八尾史氏は、古代インド仏教の僧院規則集「根本説一切有部律」の研究に取り組んできた研究者であり、その一割以上を占める「薬事」の章の初の近代語訳として、相互に言語系統の全く異なるサンスクリット語・漢訳・チベット語訳に基づく日本語訳・英訳をほぼ独力で作成・公刊した。米国・ノルウェーに分散して所蔵される新出の出土樺皮写本の大量の断片群の解読・翻刻を出版したこととあわせて、世界の研究者に研究の基盤を提供した学術的貢献は巨大である。八尾氏の一貫した関心は失われた初期経典群の回復と律の編纂過程の究明にあり、「薬事」の訳注作業を通じて埋め込まれた経典を40ヶ所見出すとともに「薬事」以外の部分からも散逸経典を抽出し、律が載せる説話の分析から律と経典との間の影響関係の実相に迫るなど、様々な角度からさらに研究を深めている。八尾氏の業績は既に国際的に高く評価されており、今後も仏教聖典の研究において世界的な活躍が期待できる、極めて優秀な研究者である。



# 安井 隆雄（ヤスイ タカオ）

(YASUI Takao)



生 年 1984 年 出 身 地 愛知県

現 職 東京科学大学生命理工学院 教授  
(令和7(2025)年 12 月 1 日現在) (Professor, School of Life Science and Technology, Institute of Science Tokyo)

専 門 分 野 ナノバイオメディカルエンジニアリング

略 歴 2007 年 名古屋大学 工学部卒  
2009 年 名古屋大学大学院 工学研究科修士課程修了  
2009 年 日本学術振興会特別研究員－DC  
2011 年 名古屋大学大学院 工学研究科博士課程早期修了  
2011 年 博士(工学)の学位取得(名古屋大学)  
2011 年 日本学術振興会特別研究員－PD  
2012 年 名古屋大学大学院工学研究科 助教  
2015 年 科学技術振興機構(JST) さきがけ研究員「超空間制御と革新的機能創成」(兼任～2019 年 3 月)  
2018 年 名古屋大学大学院工学研究科 准教授  
2018 年 Craif 株式会社 共同創業(現在に至る)  
2019 年 科学技術振興機構(JST) さきがけ研究員「生体における微粒子の機能と制御」(兼任～2023 年 3 月)  
2023 年 東京工業大学(現 東京科学大学)生命理工学院 教授  
2024 年 量子科学技術研究開発機構 上席研究員(～2025 年 11 月)

## 授 賞 理 由

### 「ナノワイヤによるリキッドバイオプシーの開発と医療応用への展開」

(Development of a Liquid Biopsy Using Nanowires and Its Medical Applications)

尿などの体液を採取し、疾患の検出や追跡を行うリキッドバイオプシーは、簡便かつ経時的に頻回検査を実施できる手法として注目されており、特にがんの早期診断や病態進行の予測技術として大きな期待が寄せられている。

安井隆雄氏は、各種ナノワイヤを開発し、それによる細胞外小胞の高効率かつ網羅的な捕捉を実現することで、従来技術を大きく凌駕する高感度・高特異度な非侵襲リキッドバイオプシーを確立した。この革新は、空間位置・材料・配置・次元を精緻に制御したナノワイヤ設計を基盤とし、ナノワイヤと生命分子との相互作用を精密に解析することで、捕捉メカニズムの詳細を解明したことによる。さらに、これらの成果に基づくがんリスクチェックサービスの社会実装も進められている。

このように、安井氏の業績は学術的にも社会的にもインパクトが高く、今後のさらなる飛躍と活躍が期待される。

# 山本 鉄平（ヤマモト テッペイ）

(YAMAMOTO Teppei)



生 年 1982 年 出 身 地 群馬県

現 職 早稲田大学政治経済学術院 教授  
(令和7(2025)年12月1日現在) (Professor, Faculty of Political Science and Economics, Waseda University)

専 門 分 野 政治学方法論、計量政治学

略 歴 2006 年 東京大学教養学部卒  
2008 年 M.A. in Politics, Princeton University  
2011 年 Ph.D. in Politics, Princeton University  
2011 年 Assistant Professor, Dept. of Political Science, Massachusetts Institute of Technology  
2015 年 Associate Professor (without tenure), Dept. of Political Science, Massachusetts Institute of Technology  
2018 年 Associate Professor (with tenure), Dept. of Political Science, Massachusetts Institute of Technology  
2023 年 Professor, Dept. of Political Science, Massachusetts Institute of Technology  
2024 年 早稲田大学政治経済学術院 教授

## 授 賞 理 由

「実証政治学のための計量分析手法および実験手法の開発とその応用」

(Development and Application of Quantitative and Experimental Methods for Empirical Political Science)

山本鉄平氏の研究は、政治学とその周辺分野における計量分析や実験手法の開発と応用に代表される。現在、広く利用されている統計的因果推論では、平均的効果の推定のみが重視され、なぜその効果が生じるのかという仕組みの解明には、必ずしも十分な関心が払われてこなかった。山本氏は、共同研究者とともに、この課題に取り組み、因果効果の裏側にある構造を明らかにするための理論的枠組みと推定方法を提示し、それらを政治現象や政治行動の分析に応用してきた。特に、山本氏らが開発した因果推論とコンジョイント実験を組み合わせた手法は、たとえば候補者の政策や属性が得票率に与える影響を高精度で分析することを可能にしたものであり、現在では実験政治学における主要な分析方法として広く利用されている。このような卓越した業績に加え、山本氏が海外で指導した学生達も研究者として活躍しており、山本氏の研究と教育が国際的に大きな影響力を確立していることが知られる。山本氏には、今後も分野を牽引する卓越した研究者として、その国際的インパクトをさらに広げていくことを強く期待したい。